第 52 号　2024/2/9

「KOMABA DAY」は月に一度実施している日で、世界で起こっている様々な問題に子どもたちが触れる機会を作っています。また、同日は募金箱も設置します。集まった募金は災害などの緊急支援や KOMABA の開校以来、その活動を応援し続けているトータルペインター・ミヤザキケンスケさんのプロジェクト OVER THE WALL に役立てられます。なお楽しみながらの活動を目指しているため、「KOMABA DAY」では講師は私服で授業をし、生徒は授業中の飲食を可としています。

“関心の糸”が紡ぐ減災

「なぜ大変な方々が不安にさらされなきゃいけないんだ」

能登半島地震の発生から 1 カ月。石川県では、1 月 27 日から災害ボランティアの派遣を開始した。ようやく本格化したボランティア活動だが、地震発生から間もない 1 月 7 日に、現地で炊き出しを行っていた男性がいた。サッカー日本代表のサポーターとしても知られる、ちょんまげ隊長ツンさんだ。「1 月 7 日は発災から 1 週間経っているのに、段ボールベッドや、パーティション、トイレ車両の提供もなかった。唯一水は 1 日 3 回ほど給水車が来るだけだった」「家をなくして大変な方々が体育館や教室の床で寝なきゃいけない。食の提供が公的になされなくて、公助ではなく共助に頼る。共助なので炊き出しは常にあるわけではない。なぜそんな不安にさらされなきゃいけないのだ」「避難所の人に言うと私たちは初めてだからこれが当然だと思ってた。食事の提供もされないのが。（震災で避難するのが）初めてのことだから、ぼくらみたいに比較検討ができない。それを享受するしかない。いまの現時点の現場の対応は本当に頑張っているが、“防災計画”“連携”“初動の見誤り”は、批判なり検証が必要」そして、その「関心の糸」は、被災地以外に住む人たちの防災にも繋がるとツンさんは話す。「能登半島の人の立場で、3 週間食の提供がないかもしれないとしたら、何を備蓄すればいいか、どこに逃げればいいか、どこの避難所に行けばいいかを考えて想定する、それだけでもダメージは半分以下になり、圧倒的に減災になる。そのためにも災害のときにニュースなどを見て、『3 週間経ってもまだ食の提供がないんだ』『3 週間になってもお風呂入れないんだ』という他人事にしないことが、一番大事」（YAHOO ニュース）

被災地での炊き出しの様子

KOMABA の総合学習で何度もお話しいただいているツンさんが能登半島地震のボランティアに行っています。総合学習の際にも、災害が起こる前に考えること・現地でどんなことが起こっているのか知ることが大切だと何度も伝えてくれました。災害が起こってすぐにはいくつものメディアで報道され情報が多く入ってきますが、時間が経つと情報の量が少なくなっていきます。報道されなくなったからといって被災地の生活が良くなったということはありません。災害が起きたときの行動だけではなく、その後 1 か月、2 か月先のことまで想定できるようにこれからも一緒に考えていきましょう。

能登半島地震チャリティー授業・募金にご参加いただいた皆様、ご協力いただきありがとうございました。　(吉信)